証拠写真

ｆｅｍｃｉｒｃ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
証拠写真

【Ｎコード】
Ｎ８８５０ＢＷ

【作者名】
ｆｅｍｃｉｒｃ

【あらすじ】
売春罪で逮捕された白人女性に対する究極の処罰。

（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

刑務所医を務めているファティマは、宗教警察から送られてきた二件の性犯罪に関する証拠写真を確認しながら、嫌悪感から顔をしかめていた。

「まったく！　白人女たちは、どうして、これほどふしだらに振舞うことができるのかしら？」

ファティマ医師が手にしている写真には、白昼堂々、浜辺で男性と淫らな行為に及んでいる白人女性の姿が写されていた。女医は呆れかえりながら、さらに呟く。

「そもそも、どうして、欧米諸国の政府は、私たちの国のように自国の女性たちに対して慎み深さをきちんと教育しないのかしら？　おかげで、私たちが、彼女たちの性犯罪を取り締まり、そして、彼女たちを矯正するための労力を払わなければならないんだわ」

宗教警察には公衆の面前での猥褻な振る舞いを取り締まる密命が与えられていた。そして、私服警官たちが、いつ如何なる時でも不道徳な行為の現場を押さえることができるよう、常に望遠カメラを携帯して浜辺を定期的に巡回していたのだ。

この二人の売春婦――ローラとシンディーも同じ日に同じ場所――かろうじて百メートルほど離れている浜辺で逮捕されたのだ。そして、過去の判例によって即決裁判で有罪を言い渡された。

二人が裁判で宣告された公式的な処罰は懲役刑六か月だったが、実際には、それ以上に厳しい処罰が下されることになっていた。それは宗教警察によって求められたものであり、決して公にされることのない内密の処罰であった。しかし、まさに裁判官自身も、その処罰を売春婦たちに科すべきだと考えていたので、必要な令状に署名することができて、とても満足していた。そして、その内密の処罰については、二人の淫乱な女性には告げられなかった。もし、その処罰の内容をローラとシンディーが知れば、大きなショックを受けたに違いなかった。

売春婦たちが刑務所に拘留された翌朝、黒いベールを被った女性看守たち四人が牢獄の入り口に現れ、その中の最年長者が居丈高に

告げた。
「服も下着もすべてを脱いで、裸になりなさい」
その言葉に従い、二人の白人女性が全裸になると、手錠をかけられて、牢獄から連れだされた。そして、そのまま、いくつもの鋼鉄製の扉が並んでいる通路をゆっくりと引き立てられていった。裸で連行されることに、なんら疑問を抱いていない売春婦たちは、自らの運命について、未だに知らぬが仏だった。
まともな神経の持ち主ならば、屈辱を感じるであろう裸の行進を牢獄の扉にある小さな窓から覗き見ていた他の囚人たちは訳知り顔で暗い笑みを浮かべていた――誰もが、これから二人に対して行われるであろうことについて、とてもよく知っていたのだ。自らの経験によって……。
刑務所の医療棟に到着すると、最初にローラが診察室へと引き入れられ、シンディーの方は隣の控え室で待機するように命じられた。
「診察台に座って！」
最年長の看守が大きな声で怒鳴る。
「足をあぶみに乗せて！」
中年女性の口調には、有無をも言わせずに従わせる強圧的な雰囲気があった。ローラは、単なる通常の健康診断が行われるものだと理解して、その命令に素早く応じた。
ローラの腕が頭よりも上方へ乱暴に引かれ、手錠が留め金へと繋がれた。それによって、巻揚げ機にかけられたように引き伸ばされた体は背中を弓形に曲げさせられ、骨盤全体を上方に向かって突き出すような態勢にされた。その後、足首と太腿が革のベルトであぶみへ固定された。
そして、室内にクランクの回転音が響いたとき、あぶみが左右に開くように離れ始めたので、ローラは少しだけ狼狽えた。性器を完全に晒して陰門が開ききった状態となるよう、あぶみは少しずつ確実に広げられていき、太腿の筋が限界に達して引き攣り始めたところで、ようやくその移動を停止させられた。最後に診察台の真上に

取り付けられている無影灯の明かりが灯される。
今、完全に開ききった女性器は明るい灯りに照らし出されて、ピンク色の肉芽や肉襞を淫らに輝かせていた。これが売春の罪を犯す破廉恥な女性へ最大級の屈辱を与えるものだったとしても十分に効果的な処罰となっていたが、このような晒し刑の姿勢をローラに強いているのは、それとはまったく別の意図によるものだった。
最年長の看守は意気揚々とした様子で控え室とは反対側の部屋へ入っていく。
「ファティマ先生、西欧人の準備が整いました」
中年のアラブ人女性は独善的な笑みを浮かべながら報告する――とくに『西欧人』という単語を発するときに軽蔑的な冷笑で唇を歪めていた。
「わかったわ」
ファティマ医師は、白人女性が逮捕された後に撮影された外性器の写真を詳細に検討していたので、素っ気なく返事をした。
「この売春婦たちが罪を犯さざるを得ないのも無理はないわね。これをご覧なさい」
女医は女性器のクローズアップ写真を助手のアズラーに見せながら、大きく発達している陰核を指し示した。
「常に刺激を与えているせいで、罪深い器官が信じられないほど大きく発達しているわ。この女性が淫乱な性癖から逃れることができないのもやむを得ないことだわ。――こちらの写真もご覧なさい」
もう一人の白人売春婦の外性器を接写した写真をも示す。
「この異常に発達している付属器官の大きなこと……。罪深い器官が、これほど大きく勃起した状態となっていては、いかなる女性といえども道徳的に振る舞うことなどできはしないわ」
「あまりにも猥褻すぎますわ、先生」
二枚の写真を見つめていたアズラーは、その顔を赤らめながらも怒りを込めた口調で答える。
「西欧人女性たちは羞恥心というものを持ち合わせていないのでし

ょうか？　西欧人の男性たちも同族の女性たちが猥褻な“もの”を誇示し続けるのを、どうして許容しているのでしょうか？」
　ファティマ医師は、アズラーが発する疑問の言葉に耳を傾けながらも、彼女が用意したトレイの中身を確認していく――ピンセット、外科用メス、外科用ハサミ、鉗子、殺菌剤、縫合糸、脱脂綿、注射器、局所麻酔薬……いや、注射器と局所麻酔薬は、今回は必要としないものだった。これから行う割礼は一種の処罰だった。宗教警察では、このような場合、麻酔の使用を厳しく禁じていたのだ。
「準備はすべて整っているわね。それじゃ始めましょうか！」
　ファティマ医師は囚人に対する手術の開始を宣言すると、アズラーとともに診察室へと移動した。そして、無理な姿勢を強いられて診察台の上で苦し気に足掻いているローラに近づくと、静かに語りかけた。
「お嬢さん、これから行う処置は、あなたに耐え難い苦痛をもたらすでしょう。ですが、これは裁判によって下された判決です。また、あなたの性的な激情と放蕩を抑制することに対して、計り知れないほどの恩恵があります。これは、すべての女性に推奨される処置でもあるのです」
　本当のことを言えば、西欧人女性によって楽しまれている性的な快楽が自分たちには認められていないことに対して、ファティマ医師は深い憎悪の念を抱いていたのだ。だから、これらの売春婦たちには生涯にわたって忘れることができない苛烈な教訓を与えるべく、とくに徹底的な形式の割礼を施すようにしていたのだ。
　ローラの股間で剃毛と導尿カテーテルを挿入する処置を終えたアズラーが後ろに下がると、それと入れ替わるようにしてファティマ医師が開ききった女性器の前に進みでる。同時に一度は壁際まで下がっていた四人の女性看守たちも、これから売春婦に対して与えられる苛酷な処罰の一部始終を間近で見ようとして診察台の周囲に群がる。
「もう少し大きくする必要があるわね」

そう言って、ファティマ医師が人差し指と親指の間に陰核を挟んで、それを手荒にマッサージし始める。その愛撫は最小の刺激で罪深い器官の急速な膨張を促す手段であって、決して囚人に快感を与えようとするものではなかった。ローラは不安な気持ちを抱いていたにもかかわらず、その愛撫による股間での生理的反応を抑えることができなかった。そして、自分の全身を貫く強烈な性感から、心ならずも呻き声をあげてしまった。

しかし、ファティマ医師が小さくて先の尖った長い外科用鋏を取り上げ、刃先を開いて下側の刃を包皮と陰核亀頭の間へ差し込んでから、それをまっすぐに付け根まで押し進めたので、ローラの性的な快楽はほんの束の間でしかなかった。

「ああーっ!!」

そして、外科用鋏の刃先が閉じ合わされて包皮を真っ二つに切り開いたとき、処罰を見学する者たち全員が予想したとおり、ローラから甲高い悲鳴が発せられた。その作業を熟練している指先は膨れあがっている真っ赤なラブボタンを露わにするために両断された包皮を器用に捲り返す。

それから、ファティマ医師がいつの間にか手にした外科用メスの刃先が皮膚の付け根を慎重な動きでスライスし、敏感な器官を覆っていた包皮が綺麗に引き剥がされると、もうすぐ切り取られることになっている不運な陰核は、その先端部をたちまち露わに晒されて快楽中枢のすべてを容易に摘出することが可能な状態にされてしまう。

剥きだしの石壁に反響するローラの悲鳴は殺伐とした刑務所内の隅々にまで伝わっていく。他の受刑者たちは、今、何が行われているかを理解していたので、ほとんどの者たちが軽く溜め息をついた。そして、シンディーだけが、隣接する控え室で、未知なる出来事に対して困惑し、恐れ戦いていた。

ファティマ医師は小さなスチール製の腎臓皿に切り離された皮膚片を落とすと、今度は剥き身にされた陰核亀頭に鉗子をしっかり

と取り付け、それを思いっきり引っぱり上げた。白人女性が悲鳴を発して診察台の上で激しく藻掻くが、それを黙殺して、女医は限界まで引き伸ばされている真っ赤な肉芽の付け根に外科用メスを突き刺した。

　ローラが身も凍るような絶叫を張り上げ続ける中、それに頓着することなく、ファティマ医師はゆっくりとした正確な手技で外科用メスを動かし続ける――まず長く引き伸ばされた肉柱の根本が鋭い刃先によって外皮から環状に切り分けられ、さらに白膜に包まれている芋虫のような勃起組織が周囲の柔肉から少しずつ切り離されていく。

　ファティマ医師は再び外科用鋏を取り上げると、快楽器官を恥骨上部へ繋ぎ止めている繊維組織に開いた刃先をあてがい、無造作に閉じ合わせた。その直後、鈍い断裂音を発して陰核堤靱帯が切断される。そして、性感神経を内包する二本の肉根のみで体に繋がっている状態にされてしまった陰核を女医が鉗子で上方へ引っぱり上げると、血まみれの芋虫状器官がずるりと体外へと引きだされ、二股に分岐して恥骨弓の左右へ連なる部分までもが完全に晒けだしてしまった。

　もはや、ローラの享楽的なセックスライフは風前の灯だったが、股間から脳髄へと突き上げてくる激痛に苛まれ続けている本人には、その事実を理解できるだけの現状把握能力も余裕も何もなかった。ただ全身を痙攣させるように震わせて途切れ途切れの悲鳴と喘ぎ声をあげるだけだった。

　ファティマ医師が三度外科用メスを取り上げる。それは、これまでのものとは違い、特殊な用途のためにデザインされた細長い刃を持つ外科用メスだった――体内奥深くから快楽器官を恥骨に繋げている陰核の根ともいうべき細長い勃起組織を繊維組織の中から切り出すためのものだった。

　売春婦から性感神経を可能な限り切除するため、ファティマ医師は陰核亀頭を挟み込んだ鉗子を力一杯引っぱりながら、特殊な外科

用メスで肉根の深い部分まで抉り始めた。無麻酔で敏感な器官の一切合切を摘出するという耐えがたい苦痛を伴う処置に、ローラの絶叫し続ける声も枯れ始めていた。
そして、陰核脚を周囲の筋組織から十分に剥離することができたと確信したファティマ医師は、今度は外科用メスから細長い外科用鋏に持ち替えると、すでに体外に引っぱり出されてしまっている陰核体へと繋がっている二本の勃起組織を伸ばせる限界まで引っぱり、可能な限り付け根に近い部分に刃先をあてがって続けさまに断ち切った。
それから、最後の仕上げとして、ファティマ医師は白人女性と快楽器官を繋いでいる繊維状の陰核神経を目一杯引き伸ばし、それを根本で切断する――その瞬間、ローラはきつく固縛されて下半身を大きく突き上げさせられているにもかかわらず、その体をさらに激しく仰け反らせるようにして、人間離れした絶叫を刑務所中へ響きわたらせた。
今や、売春婦の性的な快楽中枢は外科手術によって、その体から完全に摘出されていた――女医が手にした鉗子を持ち上げると、切り離したばかりの淫奔な器官を周りに群がる女性たちに掲げて見せた。
「サラート」
「サラート！」
全長が十センチ以上もある、末端部が二つに分かれている芋虫のようなピンク色の肉片を目にしたアズラーや看守たちは、口々に大声で叫び合う。
「潔白！」
「潔白！！」
周囲の女性たちの泣き声のような喧噪が静まると、売春婦から切り取られた罪深い器官は先に切除された包皮がある腎臓皿の中へ無造作に投げ込まれ、ベチャという不気味な音を立てた。それから、ファティマ医師は陰裂上部にぽっかりと口を開けている肉穴の処置

に取りかかった。激しく出血する血管を手際よく結紮し、断ち切られた陰核神経の末端部を丁寧に焼灼して、その傷口を縫合糸で素早く縫い合わせる。

淫乱な白人女性に対して行われた陰核切除術は完璧だった――それを清々しい達成感をもってファティマ医師が終えた今、女性の心身を穢す罪深き肉はほんのわずかな残滓さえも売春婦の股間から完全に取り除かれていた。その場にいて、その神懸かり的な切除術の様子を目の当たりにしたアズラーや看守たちは全員が互いに微笑みを交わし合って、満足げに頷き合っていた。

しかし、ローラに対する割礼手術は、これで終わりではない。陰核切除術による傷口の縫合が終わるや否や、左側の小陰唇全体にわたって特殊な鉗子が取り付けられた。それは肉襞の付け根を両側から押しつぶす機能を有した二枚の金属製フレームで、それらを固く閉じ合わせるためのネジも取り付けられていた。

そのフレームを完全に閉じ合わせる前に肉襞を引っぱり上げて、その付け根に沿って縫合糸を縫い込んでいく。これによって肉襞を切り取った後に傷口を縫い合わせる手間が大幅に省けるのだ。多くの女囚たちに割礼手術を施してきたファティマ医師ならではの効率性を求めた工夫だった。

鉗子のネジを締め終えたファティマ医師は肉襞への血液供給が完全に途絶えるまで数分間をのんびりと待った。それから、不浄なる肉襞が完全に切り離されるまで、その付け根を挟み込んでいる鉗子に沿って外科用メスの刃先を上下に繰り返し走らせた。

すでに苦痛を訴えて泣き叫ぶ声が診察室内から消えていたため、ファティマ医師が行う割礼手術は粛々と進められていった。処罰を与える者にとっては無念なことに、処罰を受ける者にとっては幸運なことに、陰核器官を摘出された段階で、ローラは完全に気を失ってしまっていたのだ。

その特殊な鉗子は右側の小陰唇でも再び使用され、同じく縫合糸も縫い込まれた。そして、左側のときに為されたものとまったく変

わらぬメス捌きが繰り返された。言うまでもなく、淫乱な白人女性から切り取られた二枚の罪深き肉襞も先に切り取られた肉片がある銀色の腎臓皿に放り込まれていた。
　こうして、ローラの割礼手術はすべてが終了した。何も知らされず、先に処罰を執行された彼女は間違いなく運がよかった。隣の控え室で待機させられていたシンディーは自分を待ち受けているに違いない未知なる運命に言い知れぬ恐怖を感じながら激しく苦悩していた。むろん、彼女が本当に苦しむのは割礼手術が開始されてからのことだ。
　近くの男性刑務所で、共同正犯の罪に問われたイギリス人の男性たちが自分たちに為された処置と似ている“浄化”処罰を執行されているという事実を聞かされたとしても、この二人の白人女性にとっては、なんの慰めにもならないだろう。
　ローラのものよりも一回り大きな陰核を持つシンディーの割礼手術は、さらに苛酷なものとなった。それはローラの割礼手術よりも時間をかけて徹底的に行われた。当然ながら、ローラのときと同様、シンディーの喉からも悲痛な絶叫を引きだすこととなった――その怪鳥が発するような悲鳴は長時間にわたって刑務所内の石壁に谺し続けていた。
　はたして、これらの西欧人たちは自分たちの不道徳な振る舞いの結果について、いつになったら学習するのだろうか？

（後書き）

　この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は　ｌａｉｒ－ｏｆ－ｈｏｒｒｏｒｓ．ｃｏｍ　というアダルトＳＮＳの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループ„Ｎｅｗ　Ｅｍｂａｂａ„に投稿された　Ｍｉｋｅ　Ｓｃｏｔ　氏による、„ＴＨＥ　ＥＸＨＩＢＩＴＳ„です。Ｍｉｋｅ　Ｓｃｏｔ　氏は本当に短いショートショートを数多く投稿しているのですが、この作品はやや長めで、一応、ストーリーの体裁を成しています。と言っても、話の展開が飛ばし気味の感であることは否めません。いずれ、もう少し補いたいと思いますが、とりあえずは暫定公開版というところです。

　タイトルの『証拠写真』は、原題の„ＴＨＥ　ＥＸＨＩＢＩＴＳ„の直訳である『証拠物件』から取っています。最初は『猥褻物陳列罪による処罰』とかにしようかとも思ったのですが、あまりに意訳しすぎているのと、ほとんど話を要約してしまっているタイトルだったので、原題に近い『証拠写真』としました。

　儀式的な割礼よりもメディカル系の割礼手術や処罰による割礼に萌える訳者としては、けっこう好きなシチュエーションの話であり、翻訳するのが楽しかったです。同じ　Ｍｉｋｅ　Ｓｃｏｔ　氏による似たような刑務所モノに『予期せぬ結果』という作品もあるのですが、こちらの方はもう少し長めで、まだ翻訳が終わりきっていません。少しずつ進めたいと思っていますので、乞う、ご期待というところです！